

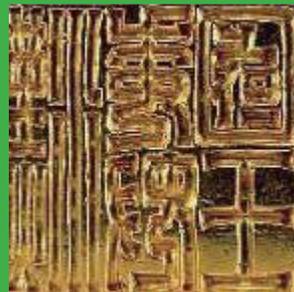
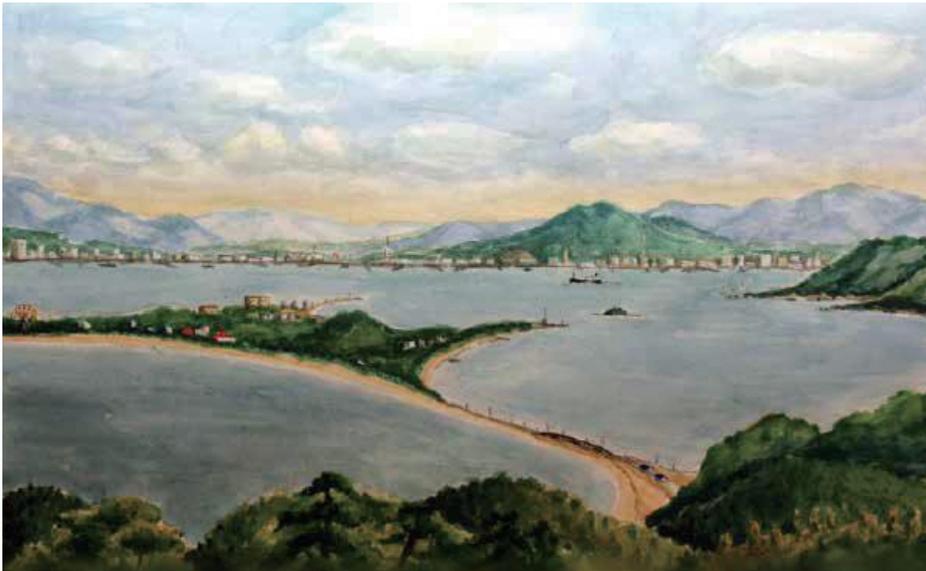
歴史

歩・歩・歩
さんぽ

悠久の歴史と
万葉のロマン

志賀島 西戸崎

志賀島・西戸崎地区
歴史ガイドマップ

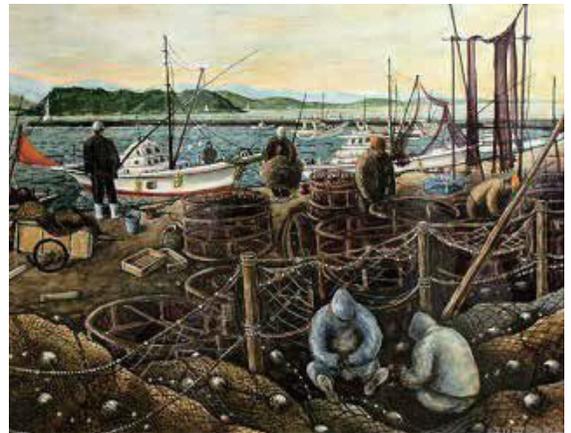


志賀島

『漢委奴国王』の金印出土地として歴史教科書にも載る志賀島は博多湾の入口に白砂青松の海の中道に続いてこぶしのように横たわり、橋（昭和6年竣工）一つによって連なった、周囲12km、面積5.87km²の小さな島で玄界灘と博多湾の境に位置する。

島は古くから『古事記』『日本書紀』『万葉集』に記され、万葉集には23首が詠まれ島内に9基、大岳に1基の歌碑が建っている。他に記念碑・荒雄の碑が建つ。

古代から海上交通の要衝であり、外国の文献にもその地名が見える。平安末期からは、天皇家所領の荘園（長講堂領）であったが、南北朝・室町時代は一時、九州探題の一色範氏・今川了俊の支配下となり、その後、大内氏、小早川氏の支配を経て、江



戸時代は福岡藩領で明治に至った。

島は、南北西に位置する志賀・勝馬・弘の三地区からなり、農業と漁業で生業をたて特に果実は明治以降より栽培され、枇杷・日向夏・甘夏柑・苺などは現在島の特産となっている。

金印（きんいん）

天明4（1784）年に発見された金印『漢委奴国王』は横綱級の国宝である。弥生時代の紀元57年、奴国の国王に中国、後漢王朝が贈ったとされる。この金印は手のひらにすっぽりと収まるほどの小ささに比して、その存在価値は逆に巨大である。紀元一世紀、日本と中国が交流していた確かな物証であり、当時を窺い知る第一級の資料といえる。しかし、この金印は発見以来、今日にいたるまで多くの謎に包まれている。

発見者といわれる百姓甚兵衛、藩の文書（甚兵衛口上書）によれば志賀島の百姓であるが不思議なことに彼の名は島内寺院の過去帳からも村の田畠名寄帳からも、その名を見つけることができない。発見の経緯もまた謎に包まれている。一緒に出てきた

遺物は無く、明確な出土状況もわからない。その上はっきりした発見地点さえ明らかではない。真贋論争が絶えない一因が出土の謎と説く研究者もいる。

『漢委奴国王』この五文字をどう読むか、明治以降、三宅米吉氏の『かんノわノなノこくおう』が定説となっているが今日でもイト国を筆頭に異論が多い。

遺跡（出土地）の性格については金印遺棄説（亀井南冥）、隠匿説（中山平次郎他）埋納遺構説（森貞次郎・西谷正）、墳墓説（三宅米吉他）、石棺説（塩屋勝利）金印隔離説（大森志郎）等々ある。その様に金印の周辺は謎だらけである。

燦然と輝く金印の背面の謎はまだまだ深い。

志賀海神社（しかうみじんじゃ）



古代海人族阿曇氏が祀る神社で、本殿に綿津見三神（底津綿津見・仲津綿津見・表津綿津見）を、相殿に玉依姫尊・神功皇后・応神天皇を祀るが、実数は不明。

神として、宗像・住吉の神とともに日本神話の初期に属する、起源は古く歴史ある神社（旧官幣小社）である。

創建は不明なるも、現在地への遷座は平安期とされる。

阿曇氏は海人部などを率いて朝廷に仕えた豪族で、「日本書紀」に処々の服従しない海人を平定したことにより「海人の幸（みこともち）となす」と記されている。

阿曇氏の分布は、奥羽、信濃から豊後の全国にわたっている。

筑前国続風土記に、島の中には375社もの末社が満ち溢れ神の島として聖域化されていた、とある。現在は摂社4社・末社19社。

鎌倉時代には交通の要衝に位置する名社として地位を保つも、南北朝や戦国の動乱を経て荒廃、15世紀に大内氏が再興、豊臣秀吉の寄進や小早川隆景・黒田長政などの藩主の崇敬により社殿等の整備もあって、現在に至る。

《鹿角堂ろっかくどう》

納められている鹿の角は約1万本ともいわ



れるが、実数は不明。

神功皇后が対馬にて鹿狩りをされ、その鹿の角を奉納されたという由緒により、その後も信仰の証として奉納されたといわれる。

《亀石 かめいし》

神功皇后が三韓出兵の際、「安曇磯良丸」が海の中国のシオヤ鼻に現れた時に乗った2匹の亀が、石になったものといわれている。



《山の神 やまのかみ》



海と山は密接な関係がある。「山たて」と呼んで舟は山を目標にして航行し、山が豊かであるほど栄養のある水が海に流れ込み海藻が繁茂し、そこに魚がたくさん寄って来る。海に生活する人たちにとっても山は貴重な存在であった。

そのため春秋2回（4月15日・11月15日）五穀豊穰豊漁を祈願する民俗行事「山誉祭（やまほめまつり）」（＝無形文化財）が行われる。その神事では、古老である社人が「あゝらよい山 繁った山」と誉め称え、弓を引き釣りに行く様子が表現されている。

この祠に不要の財布を納めると、財運が開けるといわれている。

《歩射祭（ほしゃさい）》＝無形文化財
新年を言祝い年中の四界安全を祈願する、当社最大規模の神事。



1月2日から始まる一連の祭事の最終神事で、1月15日に近い日曜日に行われる。

島で人々に危害を加えていた土蜘蛛を退治したという故事に因む。

島の若者8人が、11間（約20m）離れた的を各6本の弓矢で射る。

宝篋印塔（ほうきょういんとう）



「宝篋印陀羅尼經」を納めた供養塔を宝篋印塔といい、中国・五代十国の時代、呉越王、銭弘叔が戦没者の菩提を弔うため、顕徳2（955）年、8万4千の金剛

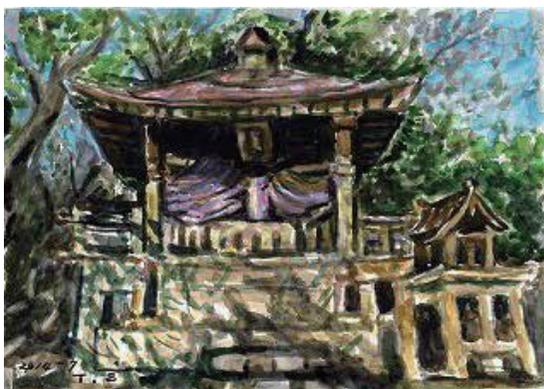
製の小塔（高さ19cm）を作り、これを諸方に配ったことに由来する。

この塔は、我国にも4基伝え残されており、内1基を重要文化財として、福岡市西区の誓願寺が所有（九州国立博物館で保管）している。この小塔になぞらえ、我国では鎌倉時代以後、石造の宝篋印塔が盛んに造立された。当社の宝篋印塔（県文化財）は石造で高さ330cm、北朝年号の貞和

3（1347）年の銘を持つ。

台座に反花を刻出しているのは、近畿地方に多い造塔方式（関西形式）で九州では稀に見る例である。

火焰塚（かえんづか）



弘安4（1281）年6月、船舶900艘と将兵4万2千人の蒙古軍は博多湾岸20kmにわたり築かれた石塁（元寇防塁）に阻まれ、やむなく志賀島に上陸、その後約1週間、昼夜を問わず海陸で激戦を展開。蒙古軍は、日本軍の壮烈な攻撃に苦戦を強いられ、さらに大疫の発生により3千人以上の兵が病死して全軍壱岐に撤退し鷹島に向かった。

この戦を前にして、高野山の高僧が南院の不動明王を供奉して五壇の大秘法をもって夷狄退散を祈祷した。祈祷後に、三つに分割された不動明王の火焰の断片は、島の志賀・弘・勝馬の旧家に伝えられたといわれているが、所在は現在不明。

蒙古塚（もうこづか）

文永11（1274）年10月、2万8千人の蒙古兵が900艘の軍船に分乗して博多に襲来。九州全土から集結した御家人5千人が迎え撃つも、圧倒的な軍勢と新兵器「て

つはう（鉄砲）」などで劣勢を強いられたが、その夜玄界灘に暴風雨が吹き荒れ、撤退する蒙古軍の大船団はバラバラになり将兵は海中に没した。翌朝、志賀島に一艘漂着した蒙古軍の破船に乗っていた将兵 220 人は生け捕りにされたあと、全員処刑された。



地元の心ある人々により、鎮魂碑「蒙古の首塚」と称する石塔が建立されたもののその後荒廃し、昭和 3（1928）年 日蓮宗勝立寺の住職・信徒により蒙古軍供養塔が完成したが、先の福岡県西方沖地震で崩壊したため再建され現在の姿となっている。

志賀島の浦島太郎伝説

二見岩と言われる三角形の岩が二つ並んだところが龍宮瀬といわれ太郎と乙姫が出合った場所といわれている。

《伝承『物語』》

志賀島の北側、玄界灘に面する所を勝馬というが、島では浦島（裏島）と呼んでいる。この村に太郎という青年がいた。ゆくゆくは郷長の田中豪右エ門の一人娘の姫子と夫婦になる仲であった。



ある日漁に出た太郎が海辺で傷ついた亀を助け、傷を癒し海に帰してやった。その後、荒天の大波に太郎は呑み込まれた。数日後、浜辺に打ち上げられた太郎を、村人が見つけ懸命に介抱する。一命を取り留めることは出来た。それ以来『助けた亀に連れられて龍宮城に行った』とうわ言をいう。

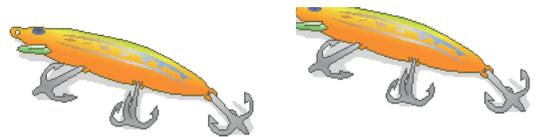
手立てをつくしたが、良くならないので豪右エ門は一策を案じた。海岸の島々を鮮やかに彩り、屋敷を龍宮城のように飾りつけ姫子を乙姫様のように着飾らせた。村の娘たちも侍女に仕立てて、太郎を迎え入れた。

ショックを受けた太郎は立ち直って正気に返った。やがて二人は村人に祝福されて結ばれたという。

《処々の『浦島太郎説話』との比》

この物語は、『助けた亀に連れられ龍宮に行き、乙姫の客となって三日間歓待され、玉手箱を貰って来たが、三日の間に村の様子も、すっかり変わっていた。途方にくれて玉手箱を開いてみたら、白雲が立ち昇って太郎はたちまち白髪のお爺になった。』

世界的に分布する仙境滞留型説話と大筋類似しているが、時間的な大きな変動が無く現世に戻って、婚約者としてめでたく結ばれるところが異なる。



志賀島の寺院

志賀島には、志賀海神社の神宮寺で金剛山吉祥寺（当初天台宗のち臨済宗）という寺院があったが明治の神仏分離令で廃寺となり、現在3寺院がある。何れも臨済宗東福寺派に属し、博多承天寺の末寺である。

長寿山西福寺（勝馬）

（ちょうじゅざんさいふくじ）



【開山】宗祖聖一国師法嗣無為昭元（大智海禅師）天和3（1683）年

この寺の創立は新しく、当時檀那寺（志賀荘厳寺）が遠いことを不便とする勝馬村民の要望により、郡代吉田孫右衛門の計らいにより建立された。承天寺の門徒玉峰珠首座が燈籠堂番の扶持を譲り受けて住持となり、開山には無為昭元（大智海禅師）を勧請した。勝馬の全戸が檀家である。この寺の建立様式は中世の禅寺と趣を異にしている。

蓮台山荘厳寺（志賀）

（れんだいさんしょうごんじ）

【開山】聖一国師，弘安元（1278）年
第二世中興，宗岳座元永禄10（1567）年

明治元（1868）年神仏分離令の時，吉祥寺を合併し仏像・仏具を引取る。

【本尊】延命地藏尊【寺宝】木造聖観音立像（平安時代中期作・174.0cm）

文殊菩薩騎獅像



弘休山香音寺（弘）

（こうきゅうざんこうおんじ）



【開山】宗祖聖一国師法嗣潜溪処謙普円国師 普円国師は承天寺十世（1312～23）延宝年間（1673～81）に承天寺の春嶺首座が再興。

【本尊】聖観音菩薩像 伝行基作

弘法大師が裏山で休息された言い伝えから名付けられたとされている。

元禄10（1697）年頃から始まった筑前国中33ヶ所霊場の14番札所で著名。

西戸崎地区

西戸崎地区は、玄界灘と博多湾からの風と潮流によってできた半島形の大砂嘴地帯で、大嶽神社のある大嶽（標高 43.6 m）と小嶽を除くと殆どが平地である。



この地区は砂地のために、7～11世紀にかけて塩屋に製塩と漁業を生業とする集団（海の中道遺跡）の痕跡が見られる。

江戸時代万治3（1660）年、加藤弥左衛門成昌が松の植林に成功して、不毛の砂地から白砂青松の地になり、明治20（1887）年頃は28戸の住民が住み、向浜とよばれ自給自足ながら穏やかな生活が営まれていた。この様な生活も西戸崎が石炭積出地として築港され、博多湾鉄道の開通により、人口の急増とともに変化した。明治42（1909）年には製油所（後に油槽所）設置や昭和12（1937）年、西戸崎炭鉱開坑により海軍石炭積出港として第二次世界大戦末まで繁栄した。

大戦後、西戸崎東北部は米軍基地として接收され、異国情緒ある風景を醸し出していたが、昭和47（1972）年の基地返還後、その跡地には建設省（現国土交通省）直轄の「海の中道海浜公園」が昭和56（1981）年に開設され、これにホテルやマリナーワールド（水族館）、ゴルフ場、マリナーなどを加え、現在は一大レクリエーション・リゾート地区になっている。

リトルアメリカン～西戸崎

昭和20（1945）年秋、日本の敗戦により雁ノ巣から西戸崎東北部へのアメリカ軍の進駐が始まった。広大な基地内には、芝生の広場、将校クラブやカマボコ兵舎（独身寮）、BX（食料品販売所）・PX（食料品以外の販売所）に溢れる商品、ガソリンスタンドやボーリング場など当時の日本人が目にするののできない社会が現出した。

基地外は、下士官の住宅や米軍ハウスなどが沢山建てられ、住民の多くが、米軍住宅の家事や子守など色々な仕事で働いていた。西戸崎の町にはバーが建ち並び、兵士同士や兵士と日本人とのトラブルは日常茶飯事でMPが出動し、西部劇さながらの場面も珍しくなかった。昭和25（1950）年朝鮮戦争が始まると米軍の後方基地となり、水上飛行艇が着水し、その中から物資を積んだトラックやジープが何台も出てきたり、揚陸艦からは戦車や装甲車、兵士達が出てきたりと、戦場を感じる雰囲気だった。

昭和47（1972）年の基地返還まで、西戸崎には「小さなアメリカ社会」があったが「忽然と消え」現在基地の跡を残すものは殆ど残っていない。

海の中道海浜公園

海の中道海浜公園は旧米軍博多基地返還後の跡地に、国土交通省（当時の建設省）により整備が進められている計画面積約 540ha の国営公園で、多様なレクリエーションに対応するためテーマ別に 7 つのエリアに分かれており、各エリアではそれぞれ特徴を生かした施設が整備されている。

「フラワーミュージアム」や「バラ園」



などのある「花のエリア」、大きな芝生の広場が広がる「芝生のエリア」、「動物の森」や「野鳥の池」などがあり自然や動物と親しめる「自然体験エリア」、プールなどがあり子どもから大人まで遊べる「遊びのエリア」、「ドッグラン」や「デイキャンプ場」などがあり博多湾が臨める「博多湾エリア」、玄界灘に面し展望台などがある「玄界灘エリア」、そして、ホテルや水族館などがある「リゾートエリア」となっており、スポーツやレジャー、環境学習などを目的に年間 200 万人が訪れている。

自由民権運動と西戸崎

自由民権運動は、特に西南戦争後に活発化し、筑前では明治 10（1877）年、頭山満らを中心に開墾社が設立された。翌 11

年、開墾社は西戸崎の地（元国鉄機関庫・現在の西戸崎駅付近）に向浜塾を開き青年の教育場とする。この開墾社は同年秋成美義塾と合併し向陽社となり、本格的な民権運動が始まった。この地から自由民権思想を抱いた多くの壮士が巣立っていた。福岡での民権運動をリードしていた向陽社内の政治活動推進グループ、平岡浩太郎・箱田六輔・頭山満・進藤喜平太など旧福岡藩士は明治 13（1890）年 5 月向陽社から分離・独立して玄洋社を設立、結社の届出を行う。憲則には「皇室の敬戴、本国の愛重、人民権利の固守」を掲げた。

博多湾鉄道

博多湾鉄道（通称：湾鉄）は、粕屋炭田からの石炭を運ぶため、明治 37（1904）年 1 月 1 日、西戸崎と須恵間（粕屋線）を開通させ、翌年には宇美まで延長された。

西戸崎は、博多湾の水深が稀に深いことにより石炭の積出港として築港され、その工事は「西戸崎大築港」と当時のお国自慢に謳われるほど、福博人の目を奪う大工事であった。大正 9（1920）年、海運業参入を機に社名を博多湾鉄道汽船に変更し、最盛期には石炭輸送及び積込作業、陸揚請負の為、運搬用汽船「博鉄丸」他数隻の運航も始めた。その後宮地嶽線を建設したが、昭和 17（1942）年、戦時体制（陸上交通事業調整法）に対応、九州電気軌道に吸収合併され、西日本鉄道となり解散した。

昭和 19（1944）年、粕屋線が戦時買収により国有化され、現在 JR 九州香椎線となり、また、宮地嶽線は現在、西日本鉄道貝塚線として活躍している。

志賀島と万葉歌碑



志賀島の万葉歌碑は、全部で10基建設されています。昭和40年代の始め、時あたかも明治100年、記念行事として旧志賀島町では、ゆかりの深い万葉歌碑の建設を行うこととしました。第1号が昭和44(1969)年6月に完成、以降1年に1基の建設を予定しました。

志賀島に関する万葉歌は、全部で23首とされています。

山上憶良の海人の歌	10首
羈旅の歌	4首
遣新羅使の歌	4首
塩に関する歌	4首
その他	1首

万葉集は本来「卷子本」で20巻で構成、概ね年代順に編集されているようです。もちろん、原本ではありませんが、万葉集の

すべての文字は漢字です。いわゆる万葉仮名を主体として書かれています。(万葉仮名の例：香椎宮頓宮の万葉歌碑3首)

私たちが、現在読むことができる万葉集は、それぞれの歌の頭に1～4516の番号が付してあります。これは「国歌大観」という和歌索引書による番号です。(明治34～36年発行)この国歌大観による整理は、その後の国文学の発展におおいに寄与したそうです。

万葉歌碑1号碑の歌は、7巻(あるいは巻7)の1230番という具合です。1から4号までが旧志賀町の建設、昭和46(1971)年4月福岡市への合併後、旧町民の意志を継ぎ5号から10号を福岡市が建設。8年の長きに亘った事業は万葉歌の島としての志賀島を紹介するのに最高のもののように。

NO.	歌 詩	作者・歌碑	歌 碑 場 所
278	志賀の海人は め刈り塩焼き 暇なみ くしげの小櫛 取りも見なくに	石川少郎 10号碑	仲津宮海岸
566	草枕 旅行く君を 愛しみ たぐひてそ来し 志賀の浜辺を	大伴宿禰百代	(粕屋町 日守神社境内)
1230	ちはやぶる 鐘の岬を 過ぎぬとも われは忘れじ 志賀の皇神	詠人不詳 1号碑	志賀海神社境内(宗像 大社境内)
1245	志賀の海人の 釣舟の綱 堪へかてに 心思ひて 出でて来にけり	詠人不詳	
1246	志賀の海人の 塩焼く煙 風を疾み 立ちは上らず 山にたなびく	詠人不詳 6号碑	蒙古塚前海岸
2622	志賀の海人の 塩焼き衣 なれぬれど 恋といふものは 忘れかねつも	詠人不詳	
2742	志賀の海人の 火気焼き立てて 焼く塩の 辛き恋をも 我はするかも	石川君子朝臣	
3170	志賀の白水郎の 釣し燭せる いざり火の ほのかに妹を 見むよしもがも	詠人不詳 3号碑	志賀島漁協裏海岸
3177	志賀の海人の 磯に刈り乾す なりその 名は告りてしを なにか逢ひ難き	詠人不詳	
3652	志賀の海人の 一日も落ちず 焼く塩の 辛き恋をも 我はするかも	遣新羅使	
3653	志賀の浦に いざりする海人 家人の 待ち恋ふらむに 明かし釣る魚	遣新羅使 8号碑	志賀島小学校校庭
3654	かしふえに たず鳴き渡る 志賀の浦に 沖つ白波 立ちし来らしも	遣新羅使 7号碑	志賀中学校校庭
3664	志賀の浦に いざりする海人 明け来れば 浦廻漕ぐらし 梶の音聞こゆ	遣新羅使 4号碑	潮見公園
3860	大君の 遣はさなくに さかしらに 行きし荒雄ら 沖に袖振る	山上憶良	
3861	荒雄らを 来むか来じかと 飯盛りて 門に出で立ち 待てど来まさず	山上憶良	
3862	志賀の山 いたくな伐りそ 荒雄らが よすかの山と 見つつ俣ばむ	山上憶良 2号碑	大崎鼻・休暇村南西
3863	荒雄らが 行きにし日より 志賀の海人の 大浦田沼は さぶしくもあるか	山上憶良	
3864	官こそ さしても遣らめ さかしらに 行きし荒雄ら 波に袖振る	山上憶良	
3865	荒雄らは 妻子が産業をば 思はずろ 年の八年を 待てど来まさず	山上憶良	
3866	沖つ鳥 鴨といふ舟の 帰り来ば 也良の防人 早く告げこそ	山上憶良	(能古島也良岬)
3867	沖つ鳥 鴨といふ舟は 也良の崎 廻みて漕ぎ来と 聞こえ来ぬかも	山上憶良 9号碑	棚ヶ浜
3868	沖行くや 赤ら小舟に つと遣らば けだし人見て 開き見むかも	山上憶良	
3869	大船に 小舟引き添へ 潜くとも 志賀の荒雄に 潜き逢はめやも	山上憶良 5号碑	勝馬 休暇村駐車場脇

1号碑

【巻7 1230】



場所：志賀海神社境内参道階段を上がって
左側

建設：昭和44（1969）年6月 志賀町

石材：志賀石

詠人：不詳

【歌】 ちはやぶる 鐘の岬を 過ぎぬとも
われは忘れじ 志賀の皇神

【意】 波の激しい鐘の岬を無事通過して
も、私は決して忘れない

それが志賀の海神のおかげだとい
うことを

この歌は、航海の難所・鐘の岬の
恐ろしさと同時に、そこを無事に通
過させる志賀の皇神の加護の強さを
表しているように思います。志賀島
から遠く離れた鐘の岬でも、その加
護を忘れない詠み人の強い信仰心が、
その確かさを裏付けています。

2号碑

【巻16 3862】

場所：勝馬 休暇村南西 大崎鼻の広場

建設：昭和45（1970）年6月 志賀町

石材：志賀石

詠人：山上憶良



【歌】 志賀の山 いたくな伐りそ 荒雄ら
が よすかの山と 見つつ偲ばむ

【意】 どうか志賀の山林をひどく伐らな
いでおくれ、航海から帰ってきた荒
雄らが、よすかの山として見ながら
懐かしく思うだろうから。

航海から帰ってきた荒雄にとって、
舟から見る山の姿は、故郷に帰って
きたことを実感させる「よすかの
山」。

しかし、その彼は亡くなっている
ので、実際に山林を残す必要はあり
ません。それでも荒雄の帰りを待つ
者の僅かな希望と、その空しさが感
じられます。

3号碑

【巻12 3170】



場所：志賀島 志賀島小学校前の海岸

建設：昭和45（1970）年9月 志賀町

石材：志賀石

詠人：不詳

【歌】 志賀の白水郎の 釣し燭せる いざり火の ほのかに妹を 見むよしもがも

【意】 志賀の海人が釣りをして灯している。漁火のように、かすかにでもいい、君の姿を見る方法があれば！

「妹」とは、故郷に置いてきた妻あるいは恋人のことでしょうか。詠人は眼前の旅先の光景から、遠く会うことのできない相手へ思いを馳せています。

沖の漁火のかすかな明るさとは反対に、暗い海辺に立つ詠人の孤独と恋しい気持ちが感じられる歌です。

4号碑

【巻15 3664】



場所：志賀島 潮見公園展望台右側

建設：昭和46（1971）年3月 志賀町

石材：志賀石（黒御影石）

詠人：不詳（遣新羅使構成員）

【歌】 志賀の浦に いざりする海人 明け来れば 浦廻漕ぐらし 梶の音聞こゆ

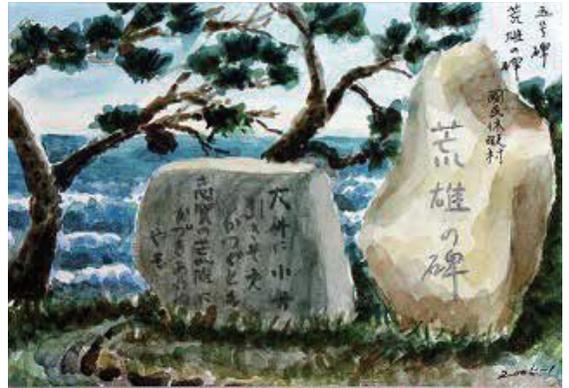
【意】 志賀の浦で漁をする海人は、夜が明けてくると入り江の周りを漕ぐらしい梶の音が聞こえる。

梶の音（聴覚）から、夜明けに入り

江で舟を漕ぐ海人の光景（視覚）を推測した歌です。響き渡る梶の音が、夜明けの静けさ、そして遣新羅使として故郷を離れた詠人の寂しさを際立たせています。

5号碑

【巻16 3869】



場所：勝馬 国民休暇村駐車場脇（荒雄碑と同地）

建設：昭和47（1972）年2月 福岡市

石材：須佐石（山口県須佐）

詠人：山上憶良

【歌】 大船に 小舟引き添え 潜くとも 志賀の荒雄に 潜き逢はめやも

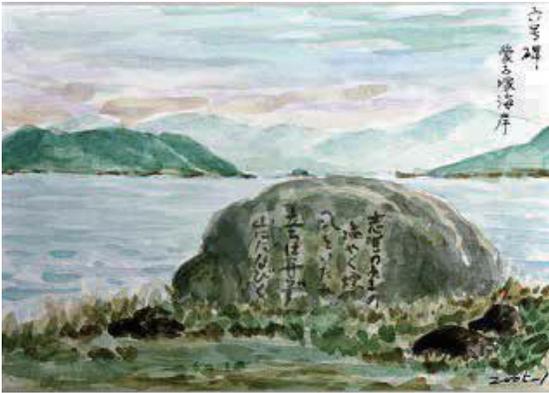
【意】 大船団を組んで水中を搜索しても、志賀の荒雄に再会できるだろうか。いや、できはしない。

遭難した荒雄の生存が絶望的であることを表す歌。

背後に、大規模な搜索隊を出したが、荒海と人手不足から実行することができない、残された人々の葛藤が感じられます。

6号碑

【巻7 1246】



場所：志賀島叶の浜（蒙古塚前海岸）

建設：昭和48（1973）年3月 福岡市

石材：秋月石

詠人：不詳

【歌】 志賀の海人の 塩焼く煙 風を疾み
立ち上らず 山にたなびく

【意】 志賀の海人の塩を焼く煙は、浜風が激しいので、立ち上らずに山に棚引いている。

地元の海人にとっては、何気ない日常風景に、旅人である詠人は感動しています。海あるいは空の青と、煙の白、山の緑という色彩が美しい歌です。

また、塩を焼くために用いる薪が山から運ばれてきたものだとすれば、山と海の間を煙が繋いでいるようにも見えます。

7号碑

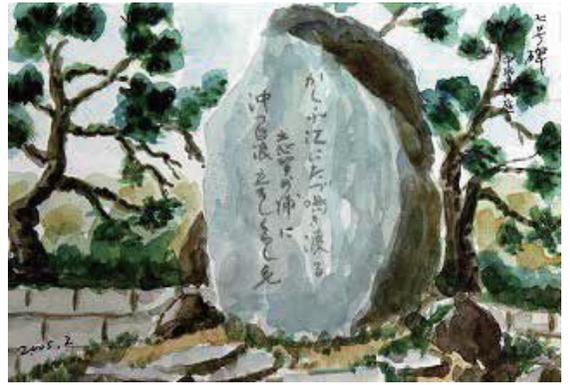
【巻15 3654】

場所：西戸崎（志賀中学校正門左側）

建設：昭和49（1974）年3月 福岡市

石材：日田石（大分県）

詠人：不詳（遣新羅使構成員）



【歌】 かしふえに たず鳴き渡る 志賀の
浦に 沖つ白波 立ちし来らしも

【意】 香椎の入り江に鶴が鳴きながら飛んでいく。志賀の浦に沖の白波が立ってきたらしいな。

「かしふえ」と「たず」、「志賀の浦」と「沖つ白波」という、青と白のコントラストが美しい歌です。しかし、鶴の鳴き声や沖に立つ波の音は難破を体験した詠人の航海への不安を表しているようにも聞こえます。自然の美しさに感動しつつ、その荒々しさに恐怖する詠人の心が感じられます。

8号碑

【巻15 3653】



場所：志賀島（志賀島小学校玄関右側）

建設：昭和50（1975）年3月 福岡市

石材：五家荘石（熊本県）

詠人：不詳（遣新羅使構成員）

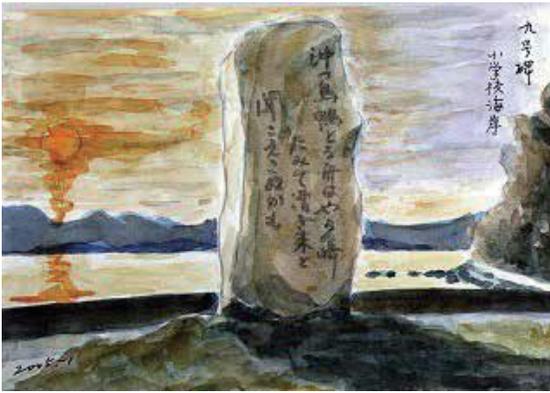
【歌】 志賀の浦に いざりする海人 家人
の 待ち恋ふらむに 明かし釣る魚

【意】 志賀の浦で漁をする海人は、家族
が待ち焦がれているのに、徹夜で魚
を釣っている。

遣新羅使である詠人は、家族が待
つ家に帰れる海人に羨望しつつ、い
つ帰れるかわからない、故郷に思い
を馳せているのでしょうか。あるい
は、仕事熱心な海人に「たまには早
く帰って家族を安心させてやったら
どうだ？でないと、家族と離れ離れ
になったときに後悔するぞ。今の私
みたいにね」と言外に忠告している
かもしれません。

9号碑

【巻16 3867】



場所：志賀島棚ヶ浜（周回道路西回り志賀
島町並みが切れる海岸左側）

建設：昭和51（1976）年3月 福岡市

石材：庵治石（香川県庵治）

詠人：山上憶良

【歌】 沖つ鳥 鴨といふ舟は 也良の崎
廻みて漕ぎ来と 聞こえ来ぬかも

【意】 沖の水鳥よ、お前と同じ「鴨」と
いう名前の舟は也良崎を巡って漕い

できたと知らせてこないものかな。

詠人である山上憶良は、沖に浮か
ぶ鴨に荒雄の舟・「鴨」を重ねて、
呼びかけています。むなしい願望か
らは、荒雄が帰ってこないという現
実に対する悲哀と、彼への思慕が感
じられます。

10号碑

【巻3 278】



場所：勝馬（仲津宮海岸）

建設：昭和51（1976）年3月 福岡市

石材：黒御影石

詠人：石川少郎

【歌】 志賀の海人は めくり塩焼き 暇な
み くしげの小櫛 取りも見なくに

【意】 志賀の海人は、海藻を刈ったり塩
を焼いたりして、暇がないので櫛箱
の櫛を手にとっても見ないことよな
あ。

詠人である石川少郎の赴任先で見
た海人の姿への驚き、彼らの多忙な
生活への憐れみが感じられます。

しかし、このようなことは、海人
たちにとっては日常のことでしょう。
貴族である詠人との意識の違
いが面白い歌です。歌碑は沖津島を
望む突端で、建設当時背に仲津宮の
森が良く見えていました。平成17

(2005)年の福岡県西方沖地震で、この歌碑も倒壊、歌碑前面に今日でもキズが見られます。目の前の沖津島は、常は潮の流れに遮られています。大潮の干潮時には、海底に島への導き(道)が現われます。



荒雄碑物語

万葉集巻16に、この十首について、次のような詞書があります。

右、神龜年中に大宰府筑前国宗像郡の百姓宗形部津麻呂を差して、対馬送糧の舟の舵師に宛つ。ここに津麻呂滓屋郡志賀村の白水郎荒雄が許に詣り語りて曰く「僕小事有り、若疑許さじか」といふ。荒雄答へて曰く、「走郡を異にすれども、舟を同じくすること日久し。志は兄弟より篤く、殉死することありとも、豈復辞びめや」といふ。津麻呂曰く、「府の官、僕を差して対馬送糧の舟の舵師に宛てたれど、容齒衰老し、海路に堪へず。故に來り祇候す、願はくは相替ることを垂れよ」といふ。ここに荒雄許諾し、遂にその事に従う。肥前国の松浦県美禰良久の崎より舟を發だし、ただに対馬を差して海を渡る。登時忽ちに天暗冥く、暴風は雨を交じへ、竟に順風なく、海中に沈み没りぬ。これにより、妻子ども犢慕に勝へずして、この歌を裁作る。或は云はく、

筑前国守山上憶良臣、妻子が傷に悲感し、志を述べてこの歌を作ると。

宗像郡に宗形部津麻呂の記録ありやと宗像ゆかりの方に尋ねたところ、「松原地区に『米だし』というバス停があった。多分その近くではと言われているよ」と。今では、その路線バスの運行さえなくなっているようです。荒雄の住んでいた所・大浦は、現在「大字勝馬字大浦」として地名に残っています。

山上憶良(～733)は、代表的万葉歌人で、大宝元(701)年遣唐少録、神龜3(726)年筑前守、天平3(731)年帰京等々の生活の中で、大伴旅人にも逢い歌の世界を見たようです。作歌の大部分は、神龜(726)年から6年間のもの、万葉集に和歌75首、漢詩文12編あります(異説も)。筑前国守として在筑紫時の白水郎の歌から3首が歌碑として島内に建設されています。

2号碑 巻16 3862

5号碑 巻16 3869

9号碑 巻16 3867

場所： 国民休暇村駐車場脇(5号碑同地)
(休暇村北側の小さな駐車場)

建設： 昭和46(1971)年3月志賀町建設

石材： 志賀石

揮毫： 阿曇磯興氏



《志賀島・西戸崎地区全図》

志賀島・西戸崎

第1版 平成21年9月
 第2版 平成22年3月
 第3版 平成27年3月
 第4版 令和2年2月



- A 西戸崎地区
- B 志賀海神社
- C 宝篋印塔
- D 火焰塚
- E 金印公園
- F 蒙古塚
- G 荒雄の碑
- H 志賀島の浦島伝説

【出典】

- 志賀島物語 筑紫 豊
- 金印ものがたり 大谷 光男
- 福岡県の歴史 川添 昭二 他 山川出版社
- 日本の神々「神社と聖地」 白水社
- 蒙古襲来・弘安の役における志賀島合戦 折居正勝
- 西戸崎洛革史 菊池 俊郎
- 西戸崎のうつりかわり 西戸崎公民館内、郷土史研究会
- 福岡市史 福岡市
- 空撮写真 国営海の中道海浜公園提供
- 【表紙の写真】 国宝「金印」福岡市博物館提供
- 【表紙等の絵画】 志賀島在住 坂本恒義氏提供



【お問い合わせ】

福岡市東区総務部 生涯学習推進課

☎ 812-8653 福岡市東区箱崎2丁目54-1

☎ 092-645-1144 FAX092-645-1042

E-mail gakushu.HIWO@city.fukuoka.lg.jp

発行 福岡市東区総務部 生涯学習推進課
 編集 東区歴史ガイドボランティア連絡会「歩歩歩（さんぽ）会」